

野坂良吉さん(88)  
 歌子さん(82)  
 西町2

富山県下新川郡飯野村(現入善町)で4人兄弟の農家の二男として育ちました。尋常高等小学校卒業後、13歳で東京の会社へ。1944(昭和19)年、16歳で横須賀の旧海軍航海学校に入校しました。

修了後、旧海軍特攻隊に志願。すでに戦局はひっ迫し、三重県鳥羽市の日和山防空壕で、最後の決戦に備えて防空壕掘削の日々。幸いにも戦地に出る前に終戦を迎え、18歳で無事生還することができました。

「航空学校はいよいよつらかったな。毎日麦飯で茶碗一杯だけ。腹減って、腹減ってどうにもならん。ラッパの練習する、と言って朝早く海岸に行つて、海藻採つて食べていたよ」。

終戦後、父親から大工を勧められ、20歳で富山の木工棟梁に弟子入り。3年の年季奉公が明け、24歳の時仕事を求めて仲間と2人で東川にやって来ました。

「西9号に米田のガンさんっておじさんがいた。『仕事がなくたって金も払ってやる』って言われてさ。内地ではまだ半人前で仕事がなかったけれど、こっちに来たらいっぱいあつた」。



翌年一人で再び訪れ、それがこの町での新たな人生の門出。『内地から来た一人大工だ』と評判を呼び、2年目にはみんなが頼みに来たそうです。

「四国出身の人の所に行つたら、その後四国の人みんな頼んで来た。西4号の久保さん、西9号の蝶野さん、西12号の尾藤さん」。一人大工としてのまじめな評判が次々引き合いを呼び、1年に1棟程度の注文をこなしてきました。65歳で引退するまでに町内30数棟を建て、今も6棟ほど現存しています。最後に手掛けたのは第4代町議会議長を務めた故木村重太郎さんの自宅。「重太郎さんはその家に2年しか住めなかったなあ」。

6歳年下の妻歌子さん(82)とは26歳で結婚。「同じ越中出身同士で話が合ったんだ」。結婚が決まると今の土地を買い求め、仕事の合間を見ながら10年をかけてコツコツと自宅を建てました。その家は柱や建て付けに曲がりもなく、今もがっしり。2人の娘を育て、今は札幌在住の孫5人、ひ孫3人のにぎやかな家族が年に一度集まります。

## 俳句

秋の風きようは何色燃ゆる色	高瀬潤
引力をぐぐつと持ち上げ西瓜抱く	石澤清宏
食欲をそそるもみじの箸袋	三島智
文殊の知恵なしの女子会栗笑う	若田郁
秋の蚊や羽音やさしく手術の朝	本田咲
今朝の秋羽織る一枚ダークグレー	佐々木りえ
赤とんぼ稚児の帽子にひと休み	山内みゆ
ご迷惑おかけしますと草の絮	小林ろば
節樽し双手がもの言う敬老会	杉山ひろのり
新米やまず一番の塩むすび	保科なほ
座布団を枕折りしてチチ口虫	徳光吐苦
秋時雨語ることなし老二人	杉山りつ
だいじょうぶ涙枯れても秋の虹	こばやし星来
月冴えて故郷へ続く空の青	横田則子
新米の一粒までもいとおしむ	若田久

